

「生きたい」という小さなSOSを見逃さない ために —天ヶ瀬ダムでの自殺防止対策—

柳川 雄司

近畿地方整備局 大和川河川事務所 調査課 (〒583-0001大阪府藤井寺市川北3-8-33)

本論の発表は、ダム管理者として「ひとりの自殺者も出さない」という強い信念を持ち、自殺危険者の「誰か気づいて、助けて欲しい」という「小さなSOS」にいち早く気づき、現場で出来る最大限の自殺防止策の参考となることが目的である。

天ヶ瀬ダムにおいて2008年7月から11月にかけて7名の方が自ら命を絶たれる事態が発生した。こうした事態を何としても未然に防ぐため、ダム管理者として最大限の対策を行っていくことが必要である。

本論は、自殺防止対策実施方針とこれまでに実施した自殺防止対策の紹介である。

キーワード ダム、自殺防止対策、賑わいによる防止、自治体との連携、マニュアル

1. 背景

京都府宇治市にある天ヶ瀬ダムは、1964年度に完成し1965年から管理を開始しているドーム型アーチ式の多目的ダムである。ダム構内は24時間開放し、年間約5万人の方々が、観光やハイキング、憩いの場として訪れ、宇治の名所の一つであった。

反面、ダムからの投身自殺者が絶えず、2008年度には、7月から11月に7名の方が自ら命を絶たれる事態が発生し、緊急にダム構内を立ち入り禁止とした。

クアアップする。

(2) 天ヶ瀬ダム投身自殺防止

現地における自殺防止対策をふまえたダム管理を行うとともに、「天ヶ瀬ダムでは自殺させない取り組みを行っている。」とのメッセージを発信していく。

(3) 天ヶ瀬ダムでの賑わいによる防止

一般見学者がたくさん訪れることによる癒しや憩いの場を創出することで、自殺に陶酔した気持ちを現実に戻させる。

2. 自殺防止対策の取組

「ダムを管理するものがこの状況を何とかできないか。」という思いから、現場で出来る最大限の自殺防止策の実施方針について、学識者・宇治市からのご意見をもとに「3つの視点からの自殺防止対策」に取り組んだ。

(1) 根本的な自殺防止

自殺の根本的な原因となる債務、こころ、職場・学校の悩み等を排除、解決する。これは、各種相談室の設置など主に自治体の取組であるが、ダム管理者としては自治体と連携し、自殺防止に向けた活動にできる限りバツ

3. 天ヶ瀬ダムでの対応

「3つの視点からの自殺防止対策」を基に現地対応の基本的な考えをまとめた。

ここでは、自殺をする危険性が高い者を「自殺危険者」と記す。

(1) ゾーン分割

ダム構内を3ゾーンに分割(図-1)し、堀や監視カメラ、監視員などを自殺危険者に意識させて、自殺に陶酔した気持ちを変化させる(本人が気づく、監視員が気づく、一般見学者が気づく)工夫を行う。

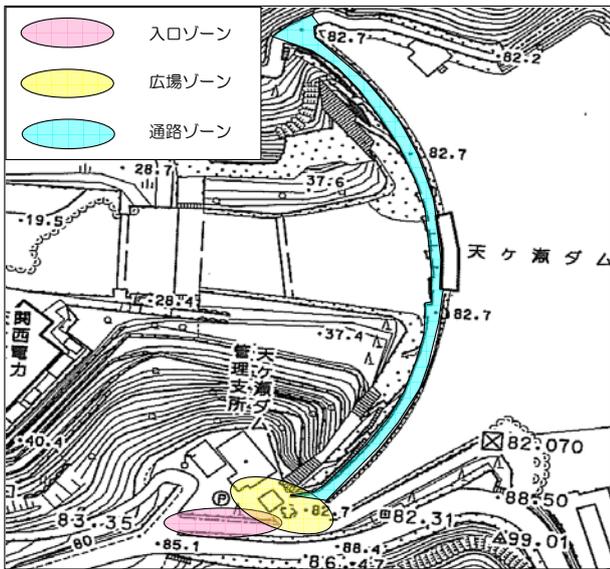


図-1 天ヶ瀬ダム自殺防止対策 ゾーン分割図

a)入口ゾーン

死に陶酔した自殺危険者の気持ちを現実の世界に引き戻すことが目的である。

大型カメラを設置し、自殺危険者に「私は監視されている」と強く意識させることで、自分の行動に気付いてもらう。また、「目隠しパネル」を設置し、自殺危険者に「死に場所」を特定させず、監視カメラや監視員に注意を傾けるよう配慮した。

入場の際は、見学者に名前と住所を記載してもらう。これは、監視員が、自殺危険者の「小さなSOS」（不審な行動等、自殺危険者が発する「助け」）に初期の段階で気づくことが期待できる。

受付後、カラーコーンで見学者の行動を誘導することで、自殺危険者の陶酔した気持ちに変化を促がす時間を与えることになり、監視員は時間を稼ぐ事ができる。



写真-1 入口ゾーンの整備（監視カメラ、目隠しパネル設置）



写真-2 入口ゾーンの整備（監視、受付、見学者誘導）

b)広場ゾーン

癒しと憩いの空間整備で、常に自殺危険者を死から現実の思考に引き戻させることが目的である。

椅子やフラワーポット等で休憩者を多く留まらせることで癒しや憩いの空間を醸しだし、自殺危険者にこの世に未練を感じさせ、自殺願望を忘れさせる。また、休憩者の視線を利用して、監視されているイメージを強く感じさせ、「ここでは自殺できない」という意識付けをさせるとともに、一般見学者の方にも「小さなSOS」を見つける機会が増える。

さらに、監視員がいることで、「監視が厳しい」ことを印象付け、「何か聞かれる」「どうしよう」など不安感を自殺危険者に与え、陶酔した気持ちに変化を促がす。



写真-3 広場ゾーンの様子（見学者による賑わい創出等）

c)通路ゾーン

自殺危険者の自助は困難、積極的に行動制止や保護することが目的である。

監視員が中央に立つことで、自殺危険者に「警備が厳しい」ことを意識させ、ダム天端を常に巡回することで、「声を掛けられる」「引き留められる」「ここでは自殺できない」という意識付けをさせる。また、普段から見学者への直接声かけ等を行うことで、「小さなSOS」に気づくことも期待される。

さらに、天ヶ瀬ダムや周辺に関するパネルを設置し、一般見学者にその場に留まらせるよう配慮した。



写真4 通路ゾーン (監視員設置, 声かけの様子)



写真6 青色照明灯



写真5 通路ゾーン (見学者による賑わい創出等)



写真7 いのちの電話募金自動販売機

d)全体

3つのゾーンを含め天ヶ瀬ダムサイト全体で自殺防止の対策を実施している。

『落ち着いた』『冷静』というイメージで、自殺防止に効果があがるのが期待される「青色照明灯」、夜間閉鎖時に進入を防止するため「門扉」、「監視カメラ」の設置等、ハード整備を行うとともに、自殺危険者に「監視されている」という意識をもってもらうため、周囲が見渡せるよう配慮する。

また、ダム開放時に構内のスピーカーから音楽を流し、癒し、憩いの空間を創出、「いのちの電話」の注意喚起看板を設置し自殺危険者に陶醉した気持ちに変化を促がす。

案内施設の横には記帳ノートを置き、楽しんでもらうなど、ソフト面からも賑わいの創出を実施している。

さらに、監視においては、心理学を専門の学識者のご意見と、各地の自殺防止の取組事例を参考にして、天ヶ瀬ダムで「小さなSOSを見逃さない」為の基本的な構内整備と対応策をマニュアルにしたものを作成して対応している。

(2) 高欄の改造

改修予定であった高欄については、模型実験を行い「越えにくい」「足を掛けにくい」「体が回転しにくい」ように改造する。

a)安全対策の考え方

高欄による安全対策の基本的な考え方は下記のとおりであり、そのイメージを図-2に示す。

- ① 乗越え防御の方策 (高さ方向の検討)
- ② 真下視界防御の方策 (ダムの真下 (減勢池) への恐怖感を与えない)
- ③ 重心セットバック (高欄を乗り越えにくい)
- ④ 足掛け防御 (足が高欄に掛けにくい)

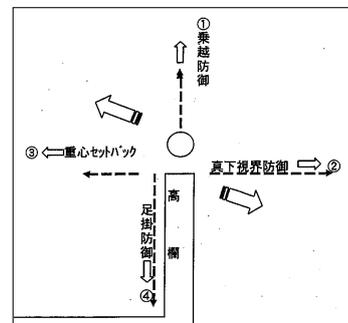


図2 高欄による安全対策の考え方

b)実機模型実験

上記安全対策の考え方を踏まえ、高欄手摺形状について

て、有識者の立会いのもと実機試験を行った。

「真下視界防御案」1タイプ、「重心セットバック案」2タイプ、「足掛け防御案」2タイプを設定し、「安心感」、「景観」、「乗越えにくさ」について、図-3の3タイプを抽出した。

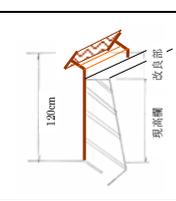
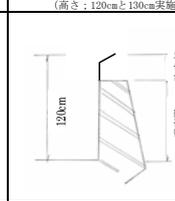
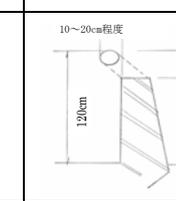
重心セットバック案	重心セットバック案 (高さ: 120cmと130cm実施)	足掛け防御案
		
タイプ A	タイプ B	タイプ C

図-3 実機模型により抽出した高欄形状

c)実機乗り越え実験

b)で抽出した形状について、有識者の立会いのもと実機乗り越え試験を行った。なお、実機乗り越え試験機は、単管足場で製作した。(図-4参照)

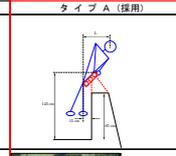
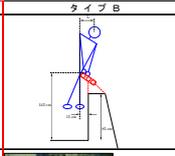
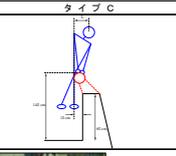
	タイプ A (採用)	タイプ B	タイプ C
乗り越え状況模式図			
実機模型写真			

図-4 乗り越え状況模式図と実機模型

d)試験結果と諸元

c)実機乗り越え試験の結果、もっとも乗り越えにくいという点でタイプA(重心セットバック案)を採用した。

表-1 実機乗り越え試験結果

	タイプ A (採用)	タイプ B	タイプ C
乗り越え時間	3.2~4.5 sec.	2.5~3.5 sec.	2.2~3.2 sec.
乗り越えにくさに関する被験者の感想	<ul style="list-style-type: none"> 高欄天端から手摺り末端の開口が最も狭く、高欄天端に足をかけにくい。(手摺りに膝下が干渉し、困難。) 手摺り上に足をかけようとしても、内側方向にすべってしまう、滑りにくい。 手摺り上に乗りかかろうとしても、手摺り末端(内側)が腿~太もも付近にあたるため、最高点に身体(腰)を密着できず、乗り越えにくい。 手摺り上に乗りかかっても、外側に上方傾斜であるため、腿より上まで足を上げて乗り越える必要があり、乗り越えにくい。 	<ul style="list-style-type: none"> 高欄天端から手摺り末端の開口が最も広く、タイプA・Cよりも高欄天端に足をかけやすい。 手摺り上に乗りかかる場合、(この程度の高さであれば)最高点に身体(腰)を密着できることから、比較的容易に乗り越えられる。 最高点に乗りかかってしまうと、外側に下方傾斜となることから、比較的乗り越えやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> 高欄天端から手摺り末端の開口が狭く、高欄天端に足をかけにくい。(手摺りに膝下が干渉し、「こつ」がある。) 手摺り上に乗りかかる場合、(この程度の高さであれば)最高点に身体(腰)を密着できることから、比較的容易に乗り越えられる。 手摺りが太いため、手摺り上に足を広げて体重をかけやすく、乗りかかりやすい。

表-2 決定した高欄の諸元と特長

項目 と 諸元			
高欄総高さ	130cm	手摺傾斜角度	45°
セットバック距離	15cm	手摺全幅	約30cm

e)整備状況

現地の施工においては、高欄壁や天端舗装についても賑わいの創出を考慮した整備となっている。



写真-8 高欄部の整備状況

4. まとめ

2010年4月1日から天ヶ瀬ダム堤頂部の通路をリニューアルオープン、「本開放」に切り替わり、2008年12月から取り組んできた自殺防止対策について一定の安全性は増し、ひとつの区切りがついた。

しかしながら、本開放に切り替わった事で高欄に近づくことが可能となり、自殺危険者に対しては更に注意深く監視していくことが必要である。

また、「根本的な自殺防止」等、「3つの視点からの自殺防止対策」について課題も残されている。

今後、来場された皆さんが安全に楽しくダムをご利用していただくために、より一層の自殺防止対策に取り組んでいくことが重要である。

5. さいごに

自殺防止対策は、日頃の自治体や地域社会、友人・家族等の「気づき」と「心のケア」による取組が最も重要であり、現場での自殺防止対策には自ずと限界がある。

しかし、「ひとりの自殺者も出さない」という強い信念を持ち、自殺危険者の、「誰か気づいて、助けて欲しい」という「小さなSOS」にいち早く気づき、本人に心配している気持ちを伝える。ダムを管理する者のこの思いが自殺防止へ一助となしてほしいものである。